

促成イチゴの中休み現象に関する研究

第1報 “はるのか”産地における実態について

伏原 肇・室園正敏・吉武貞敏 (福岡県農業総合試験場)

FUSHIHARA, H., M. MUROZONO and S. YOSHITAKE: Resting Phenomenon of Yield on Forcing Strawberry. 1. Actual Situation of Yield Pattern in 'Harunoka'

県内における促成イチゴは、ポット育苗の普及などにより年々収穫が早進化の傾向にある。一方早進化が進むにつれて産地では、中休み現象と称される収穫期途中の一時的な収量のおちこみがみられるがこの中休み現象の要因を解明しその対策を確立することは、安定生産上意義深いものと考えられる。県内産地のうち長期どり促成作型が中心となっている。“はるのか”産地における収量の中休み現象について、その実態を明らかにした。

1. 試験方法

収量のデータは、福岡県園芸連の資料から引用した。対象年度は1975年から1981年までの7カ年間、対象産地は筑後川下流域を中心とした“はるのか”産地で、年度により変動したが最も多かった1981年度で21カ所、最も少なかったのは1975～1977年度にかけての11カ所で、延べ93カ所のデータを用いた。データは11月下旬から4月下旬までの16旬の旬別収量割合を用いた。各年度、各産地別に収量パターンを検討するとともに、これらを総合的に考察するために主成分分析を行った。また、気象要因との関連についても検討した。

2. 試験結果および考察

年度別の旬別収量割合の変動は、第1図に示すとおりである。年度別の収量パターンの変動は大きかった。1975年は初期収量割合が低く後期になるほど高く推移し、中休み現象はほとんどみられなかった。それに対し、1977、1978、1979年は初期収量割合が高く、1月から2月にかけて中休みが顕著に現われた。1980年も初期収量が高く1月の収量

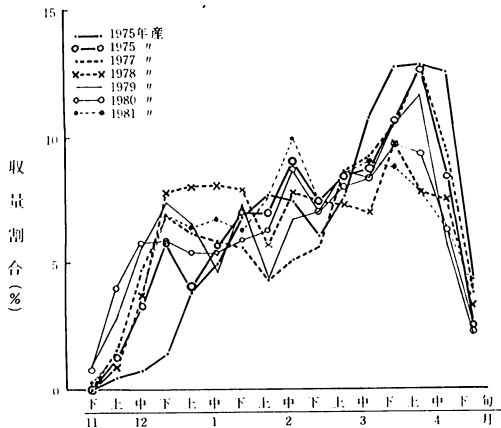
が低下した。これらを気象条件との関連でみれば、中休みの大きかった年は、いわゆる暖冬、暖秋の年であった。

産地別の収量パターン変動も大きく、隣接した産地においても中休みの程度が大きく異なった。土質との関連性については明確でなかった。

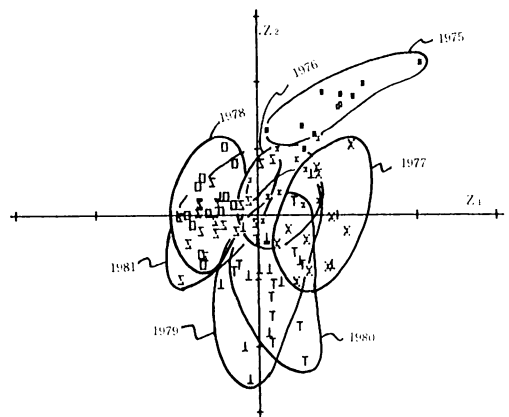
旬別収量割合間の相関では、正の高い係数がみられたのは、11月下旬から12月上旬間、1月上旬から2月中旬間および3月上旬から4月下旬間であったが、これらはそれぞれ、頂花房、第2花房および第3、4花房に対応するものと思われた。全収量と旬別収量割合間の相関では、負の係数が高かったのは、11月下旬から12月中旬間で、逆に正の係数が高かったのは、3月中旬以降の収量割合であった。

以上明らかにしたように、中休み現象は様々なパターンがみられる。そこでこれらを総合的に考察するために主成分分析を行った。旬別収量との関連性を表わす因子負荷量でみると、第1主成分の因子負荷量は12月下旬から2月下旬までの係数が負の値を示した。正の符号のうち係数が大きかったのは3月から4月にかけてであった。第2主成分の因子負荷量は11月下旬から12月下旬までの係数が大きな負の値を示した。第1、第2主成分において、各花房の収量状況をほぼ表現できるものと考えられ、第2図に示すように年度による早進化の傾向が明らかに表現できた。

これらのことから、“はるのか”産地における中休み現象は第2花房の収量低下が大きく影響しており、早期収量も中休みに大きく関与するものと思われた。



第1図 年度別収量割合の推移



第2図 主成分の散布図 (第1, 2主成分)